

## 萩博物館所蔵「葵紋付亀甲模様小袖」の服飾史的位置付け

福島 雅子 (学習院女子大学)

萩藩士村田家に伝来した「葵紋付亀甲模様小袖」および近世以前の文書類が、令和 3 年に山口県萩市の萩博物館に寄贈された。このうち「葵紋付亀甲模様小袖」は、村田家の初代である村田五右衛門安政が、徳川家康より拝領したとの伝来をもつものであり、「自家康公拝領之御服并従駿河之書状」との墨書のある畳紙に包まれ、書簡類とともに伝来した。発表者は萩博物館と共同で萩藩士村田家伝来資料の調査を進めており、本発表では、これらの調査と分析を基に、村田家伝来「葵紋付亀甲模様小袖」の服飾史的位置付けについて検討したい。

まず、本小袖の伝来について検討する。上述の墨書のある畳紙には、本小袖とともに「大御所さま御内たあ」と「うんなき」との間で交わされた書簡等が包まれていた。これらの関係史料の分析によれば、村田家の初代である村田五右衛門安政は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に捕らえられた朝鮮人捕虜であり、名は「うんなき」であったとされる。また、安政の姉も日本に連れてこられ、大御所時代の徳川家康に奉公しており、姉を通じて駿府に召し出された際に、家康から安政に馬や刀とともに「葵御紋付之御服」が下賜されたとの記述を『萩藩閥閥録』(享保 10 年成立)に見出せる。この記述が、本小袖にあたりと考えられる。さらに、付属する書簡にみえる「大御所さま御内たあ」は安政の姉であり、近年の研究で指摘される「ジュリアおたあ」であったと考えられる。朝鮮出兵の際の朝鮮人捕虜とされる「ジュリアおたあ」に関しては、これまでキリスト教信仰史等の面から研究が進められてきたが、本小袖と付属する書簡類は、これまで指摘されていない新たな関係資料といえる。

次に、本小袖の形態や素材の特徴および染織技法などを検討したい。本小袖の形態は、後世の小袖と比較すると、袖幅が狭いのに対して身幅が広く、立裄が短いなど、近世初頭の小袖に通有する形態上の特徴を示している。また素材には練緯地が使用され、亀甲繫などの主要な意匠を全て縫い絞りで表わすなど、尾張徳川家等に伝来する徳川家康所用小袖類と共通する特徴が確認できる。

さらに、五か所に配された葵紋は、縫い絞りのみで表わされ、葵の葉は多色に彩色されており、葉に露が表されるなど、徳川家康所用服飾類に見られる葵紋の表現の中でも初期の形式に共通する特徴を有している。本小袖に表された葵紋は、徳川家康所用の服飾類に多く見られ、江戸時代以降は徳川将軍家および一門の家紋として使用が制限されるとともに、徳川家の権威を象徴する表象として扱われた。したがって、五か所に葵紋が配された本小袖は、徳川家康や近しい徳川家の者が着用するために制作されたと考えられる。

以上のような調査と分析の結果、萩藩士村田家伝来の「葵紋付亀甲模様小袖」は、おそらく徳川家康のために制作された小袖であり、新たに確認された近世初頭の武家服飾の稀少な現存遺品であるといえるだろう。